

ベトナム紀行(2)

赤ザオ族のサオさん

山奥の小さな村やそこで開かれる市場を一週間に渡って訪ね歩きました。雨は断続的に降り続き、低く厚い雲が空を覆っていて、まだ青空を見たことがありません。

持参した服は次々と雨に濡れ、洗濯しても湿度が高くて乾かず、着替えにも不自由なるようになってきました。靴も水分をたっぷり含んでずっしり重く、泥だらけです。

たった数日ですが、街の灯りが恋しくなりました。ちょっと疲れてくると、湿っぽい寝袋でなくて、さっぱりとした白いシーツのベッドに寝たくなるのが私の軟弱なところですよ。

ラオカイから北西へ四十キロほどのところにサパという高原の避暑地があります。高級リゾートホテルもあり、疲れたらこの町でフランス料理でも食べながらゆったりと休養すると決めていました。

この町は今から百十年前、ベトナムがフランスの植民地だった時代に避暑・静養地として開発された町です。高温多湿なハノイを嫌ったフランス人は、ハノイからラオカイまで延々と三百キロも線路を引き、さらにラオカイからサパまで四十キロの道路を整備し、海拔一六五〇メートルに位置するこの高原の町を避暑地として整備したのです。

現在はラオカイ省サパ県の県都として北部山岳地帯の観光の基地となっています。



ホテルの部屋から見たサパの町

またフランス人はこのサパを「トンキン・アルプス」呼んでいたそうですが、風光明媚な町としても知られています。

今まで簡素な民宿ばかりでしたのでサパでは思い切って最上級のヴィクトリアホテルに宿泊することにしました。フランス資本の「ヴィクトリア・ホテルズグループ」が伝統的なスイスの山小屋スタイルで建設



ヴィクトリアホテル

した四つ星ホテルです。

赤レンガ造り三階建てのホテルは高台にあり、町の景観とよくマッチしています。部屋の内装は、木のぬくもりに満ちていますし、少数民族の刺繍模様をあしらったインテリアが趣味良く配飾されています。

何よりうれしかったことは、泥だらけの



靴を無料で洗って乾燥させてくれるというサービスがあったことです。夕方預けた靴は、翌朝には日本を出るときよりき



れいになって帰ってきました。

早速きれいになった靴を履いて、町に出てみました。サパは今まで訪ねた山奥の寒村から比べれば大都会です。しゃれたレストランやホテルが大きな通りを挟んで立ち並び、観光客の姿も目立ちます。観光客がいれば、それを目当てに地元の女性たちが民族衣装に身を包み、手作りの

工芸品を持って集まってきます。

町の中心にある広場に行ってみました。芝生や石畳の上に商品を並べただけの露店がたくさん出ています。この町で目立つのは黒モン族の女性と赤ザオ族の女性です。それぞれがグループを作り、商品を並べています。

陳列してある藍染の生地や刺繍のポツシットなどを眺めながら歩いていると、「何を探しているの」と思いがけず英語で声がかかりました。振り向くと紅い座布団のような頭巾をかぶった赤ザオ族の娘です。娘といっても眉を剃り落としていますから、すでに結婚しているのでしょうか。

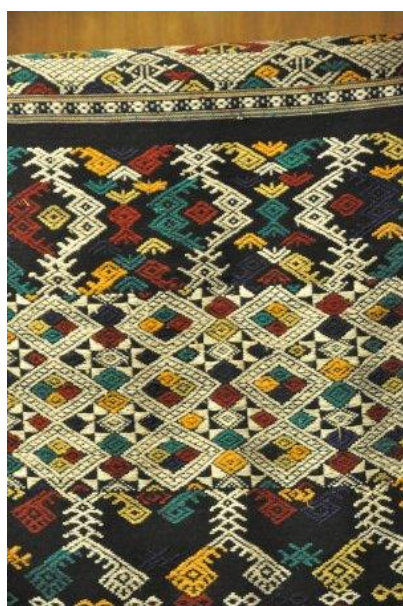
彼女の藍染の上着の襟には光沢があるシルクの糸を贅沢に使った精緻な刺繍が光っています。この襟を立てて着用し、刺繍の技を見せるおしゃれのセンスは心憎いばかりです。

彼女は「日本人ですか」、「サパは初めてですか」、「いつまでサパにいますか」などと、

矢継ぎ早に英語で質問してきます。外国人相手に土産物売る時に、英語がで

ることは有利です。恐らく路上で外国人と接しながら、独学で覚えた英語なのでしょう。

サオさんというこの英語が上手な赤ザオ族の女性は、サパからハキロほど離れた



タヴァンという小さな村から歩いてやって来たと言います。週に二、三回は村の女性たちと連れだって、この公園で刺繍の小物などを売っているようです。

「たくさん売れたかい」と聞いてみました。

「今日は全然だめよ。雨が降ると布が濡れちゃうから大変なのよ。今朝みたいに風があると、傘を指してもだめだし商売あがったりよ。それに客足も遠のくし」

「天気が良くなってきたから、これからお客さんが来るよ。ところで売っているものはあなたが作ったんですか」

「田んぼが暇な時は、一日中作っているし、忙しい時には夜になってから一針でも縫うようにしているわ」

縦四十センチ、横六十センチぐらいのテーブルクロスのような布は刺繍で覆われています。幾何学模様のかなり目の細かいものです。完成するまでのくらの日数がかかるか聞いてみました。

サオさんは布を私の目の前に広げなが

ら、「これは三カ月ぐらいかかったのよ。良い出来でしょう。すばらしいお土産になるわ」と私に手渡します。

「これはいくらだい」

「うーん、今日はぜんぜん売れないし、初めてのお客さんだから安くしておきます。五十ドルでどう」

インドや中近東で買い物をしようとする、地元の人を買う値段の十倍ぐらいは平気で吹っかけてきますが、ベトナムの山奥ではさすがにそこまであきな値段は言いません。いかにも手間がかかっていそう、それくらいはするだろうと思っていましたが、言い値で買わないのが私の性分です。

「なるほど。これは素晴らしい出来だ。遠く離れた日本の私の部屋の壁にこの布が飾られることはあなたにとってもうれしいに違いない。だからもう少し値段を下げられないか」

「私たちがオ族は布を織らないんですよ。」

だからモン族などから、米やトウモロコシと交換で手に入れたり、市場で買ったたりします。それでその布を藍で染めるのよ。染めるのも何回もやるから手間がかかるのよ」

サオさんはハンドメイドだと強調しながら、布地を裏返して仕事の丁寧さを盛んに訴えます。

「この紋様は私たちの村に昔から伝えられてきたものです。伝統的な紋様ですから、隣の人の製品も同じ紋様です。私はこの紋様しかできないし、差別化するためには丁寧を作るしかないんです」



結局、サオさんの哀願にも似た必死の訴えに、三十五ドルで買うことにしました。一ドルあれば肉のどっさり入ったフォーが二杯は食べられる訳ですから、彼女にしてみれば大きな収入を得たことになりました。

しかし毎日、商品が売れる訳ではな

く、一カ月に四十万ドン(約百ドル)の売上げを得ることはむずかしいと言います。また公園で販売するのにも、権利金のようなものが必要で、さらに店を開けることにも一ドル程度は徴収されると打ち明けてくれました。

「私たちは町に出てこられるからまだいい方なんです。もっとサバから遠くにある村では、町からやって来る商人に買ったかれたり、私たちのような町に売りに出られる人に卸したりだから、当然収入はもっと少なくなる。私は恵まれている方だと思います」

サオさんはたどたどしいながらも、十分に通じる英語でにこやかに話すので一時間以上もいろいろな話を交わしました。最近はトレッキングなどで村を訪れる外国人も増え、なかには民宿のような形で村に泊まって行く人も現れるようになったと言います。村でも外国人相手の観光客を相手にお土産屋を開いたり、住宅設備

の一部を西洋風に改築したりして、積極的に外国人を受け入れる家も現れたといえます。

一人の女性との会話だけで地域のありようを断定的に語ることは危険です。しかし、ベトナム社会の急速なグローバル化や経済発展に伴い、この地域にも貨幣経済の波が押し寄せ、ザオ族の伝統的な暮らしも徐々に変化しつつあるとの印象を受けました。豊かな自然と調和した伝統的な生活様式や粗放的な農業にノスタル



ジーを感じるだけではなく、彼らが少しずつでも豊かになろうとする変化を見逃してはいけません。

貧困、低栄養、識字率の低さ、衛生観念の欠如などまだまだ取り組まなければならない問題は多岐にわたっています。ベトナムは社会主義を標榜し、平等をうたっています。山岳部の少数民族にも経済発展の恩恵が波及するような政策展開を望みたいところです。そして少数民族の人たちも、新しい世界の変化に対応するためには自ら変わってゆく努力が必要ではないでしょうか。

ランチャオ村訪問

サバに来て二日目の朝、雲の間から青空が覗ける程度の天気になりました。すっきりと晴れ渡ることは期待できそうにありませんが、昨日までより空が明るく見えます。雲の層が薄くなっているのです。



町の高級ホテルでうまい飯を食い、温かいシャワーを浴び、快適なベッドで眠ったので元気を取り戻しました。昨日、町の広場で刺繍の布を買ったサオさんという娘さんの住んでいるタヴァン村を訪ねてみることにしました。

ホテルのレセプションで尋ねてみると、英語が話せるガイドと車を一日三十ドルで手配してくれることになりました。道は昨夜まで降り続いた雨で相当ぬかるんでいるだろうということで、ホテルの長靴を借してくれることになりました。

やって来たガイドは三十歳半ばと思わ

れるスンさんという女性です。黒モン族の小柄な女性で、袖に刺繍のある藍染の上着と、同じく藍染の半ズボンで長靴をはいています。紅い帽子に紅いハンドバックを下げ、きれいに化粧しています。色も白いし、洋服を着ていたらとても地元の黒モン族の女性には見えません。

彼女の住んでいるのは私が訪れるつもりタヴァン村の手前にある隣村だそうです。ランチャオ村というその黒モン族の村も合わせて案内してもらうことにしました。タヴァン村もランチャオ村もムオンホア川という流れが造った谷底の村で、ここへ降りてゆく急な坂道は車が通行できないため最後の数キロは歩いてゆくことになります。

サパは高原の上に造られた町で、もともと水利が悪く農業には適さないのです。稲作農業を主体とする少数民族たちは水が得やすい谷筋に村を造ったのです。またフランス植民地時代にサパの町を建設

するために駆り出された農民たちが、サパ近くの農業が可能な土地に定住したのが村の始まりだともいわれています。

昨日訪れた広場の脇を通り、土産物屋の並ぶ狭い石畳の道を抜けると、すぐに棚田が車窓に広がります。標高一六〇〇メートルのサパ周辺は冬になると気温が零下になることもあり、ベトナムで一般的に行われている二期作はできません。六月に田植えをして九月に収穫するというサイクルが一般的なようです。曲がりくねった細い未舗装の道を三十分ほど車で走ると、スンさんはここからは歩きますと言って車から降りるように促します。道の右側は大きな川の流れが削った谷ですが、細い道が底に向かってジグザグに続いています。谷底には雨で濁った大きな川が流れていて、その川の流れの向こう側と山との間にわずかな平地があり、緑の棚田がその平地を余すところなく覆っています。

スンさんが「私の村です」と指さす方

を眺めると、一面の緑の棚田に埋まっ
て、まうように住居の屋根が散在して
いるのが見えます。



「スンさんの家はどのあたりですか」

「私の家は少し山の上にあつて、大きな木の陰になっていますけど、家がたくさんある村の中心部の背後に見えるの丘の上です」

スンさんは川の上流部で、私たちがこれから進んでゆく村のかなり先の方を指さしました。

「スンさんは何人家族ですか」

「夫と子供二人の四人家族ですが、子供は今日は夏休みで近くの両親の家に行っています。夫は川の上流にできるダム建設の現場で働いています」

「子供さんはまだ小さいの」

「十歳の女の子と七歳の男の子です。両親の家も同じ村の中ですから、仕事がある時は世話を頼みます」

「米は作っていないんですか」

「土地はありません。しかし夫の両親の農作業を手伝って、お米は手に入ります」

谷に下りてゆく道は思ったほど悪くあ



りません。近年、ムオンホア谷筋の村々には多くの外国人がトレッキングに訪れるので、政府の補助金で整備が行われているそうです。

村への坂を下ってゆくと、籠を背負って村の方からやって来るたくさん女性のたちと出会いますがなかでも一番多いのが

黒モン族の女性です。モン族はベトナム全体では少数民族で、全人口の一パーセント弱しかいませんが、この周辺では半分以上がモン族で、なかでも黒モン族が圧倒的に多いようです。

彼らは黒に近い濃い藍染め衣装を着ていることから黒モン族と呼ばれています。花モン族のように派手さはありませんが、自ら栽培した大麻の繊維を紡ぎ、手織りし、藍染した生地はなかなか渋く、しゃれた感じがします。藍染めの後には蜜を塗って乾けたとき、光沢を出すというのですからかなり凝っています。

下は膝までのミニのキュロットスカートで、足首から膝下まで脚絆を巻いています。花モン族はサンダル履きが多かったのですが、黒モン族は一樣に長靴です。雨の季節からなのか一年中なのかは聞き洩らしました。ミニスカートといい脚絆といい、なんとなく映画で見る女忍者「くのゝ」を彷彿とさせますし、活動的な印象を与えます。



す。

ムオンホア川にかかるつり橋を渡るとラ
ンチャオ村です。つり橋の踏み板はどこ
どころが腐っていたり抜け落ちたりしてい
ますので、あまり乱暴に渡ると踏み外し
そうです。小学生らしい女の子が三人、
歌を歌いながら向こう側からやってきま

した。夏休みの最中で連れ立って遊びに行
く途中なのでしよう。

「チャオ」と声をかけると、「チャオ」と元
気よく挨拶が帰ってきました。「チャオ」は
「おはよう、こんにちは、こんばんは、さ
ようなら」に相当する便利なベトナム語の
表現です。「チャオ」はイタリア語でも親
しい人同士の挨拶に良く使われますし、
ラテンヨーロッパや中南米でも同じ意味で
広く使われていますが、外来語でし
ょうか？

車はつり橋を渡れませんから、村の中は
のんびり散策できます。村は棚田でうめ
つくされていて、その中に埋まるように切
妻屋根を深く大地近くまで降ろした住
居が点在しています。なんだか学生時代
に歩いた東北地方の田舎を思い出させる
ような風景です。

道沿いの農家の庭にはわとりが虫をつ
いばんでいますし、側溝にはアヒルの群れ
が遊んでいます。道路際には眠たげな



眼をした牛が横たわっていますし、突如足元の水たまりから蛙が飛び出します。

数人の子供たちが田んぼの畦道で遊んでいます。草むらの虫でも探しているのでしょうか。「おーい」と声をかけると、小さな男の子が手を振ってくれました。私の子供時代も遊び場はいつも畑や田んぼで

した。

田んぼにいる生き物といえばカエルやザリガニやドジョウ。そして私が好きなカブトエビ。小学校の夏休みの自由研究で、田んぼの草取り虫と呼ばれていたカブトエビの生態を観察したことを思い出しました。

村の幹線道路から少し山の方へ登ったところにスンさんの家があるというので立ち寄ることにしました。スンさんはちょっと登るといったのですが、急な坂道を十分ほど息を切らせて登ってゆくと、尾根上の台地のようなところにようやくとスンさんの家がありました。

振り向くと村の中心部にある住宅の広い屋根が銀色に鈍く光っているのが良く見渡せます。一番奥には先ほど渡って来たムオンホア川が雨季の雨を集めて勢いよく流れています。

田んぼは川沿いの低い位置に広がり、住居がそれより少し高い土地に分布して



いるのが分かります。川には堤防などありませんから、水害の危険をできるだけ避けるための知恵でしょう。

案内されたスンさんの家の前には、山から引かれた水が笕を通して勢いよく流れていました。家の南面の庭にはリングゴの木がありました。これは夫がリングゴ酒を

造るために植えたのだとスンさんは笑って
いました。

家は開け放したままです。そして玄関
というようなものはなく、内部の土間が
そのまま庭につながっています。だからとい
う訳ではありませんが、家は果樹や作業
用の机がある庭や外部空間と一体化して、
外に開かれている感じがします。家の内
部は入口から差し込む外光だけで薄暗
く、目が慣れるまでしばらく時間がかか
りました。ムオンハム村でもそうでしたが、
まだガラス窓やガラスサッシを使っている
家は少数のようです。

スンさんの家の構造は広い屋根裏を持つ
平屋の木造です。梁や桁で構造を造り、
その上にへ形の小屋を組んで屋根裏を利
用しています。日本の白川郷などにある
合掌造りの住居と基本的な構造は似てい
ます。屋根裏には収穫した稲穂やトウモ
ロコシを保存し、常に炉の煙でいぶし乾燥
させているようです。



床は良く固められた土間で、寝るのは
寝台を利用しています。寝台の脇には囲
炉裏があり、寝ているときも暖がとれる
ようになっていきます。家の奥の方は炊事場
兼物置として使われており、かまどがあ
ります。

家の真ん中には先祖を祀る祭壇のよう
なものがありました。家の中にあつて目に

ついたものを上げると、何が入っているか分
かりませんがタンスが三つ、木製のベッド、
机、椅子、壁掛け時計、カセットラジオ、
扇風機、自転車といったところです。プラ
スティックの子供のおもちゃのようなもの
も床に転がっていました。

電気は来ているのですが、小さな電球
が天井から一つぶら下がっているだけです。
いまから半世紀以上前の私が小学生の頃、
我が家にある電気製品は、裸電球とタン
スの上に鎮座する大きなラジオだけでし
た。電気を点けるのは夜の二時間だけ
で、それも「もったいないから早く寝ろ」
という祖父の一言で早々に消されてしま
いました。

正面入口の反対側、家の一番奥の炊事
場には土製の大きなかまどが据えてあり、
使い込まれた薬缶や鍋がその上に無造作
に置いてありました。また隅には素焼き
の大きな壺があり、水をためていました。
便所は家の中にはありません。庭の一

角に竹で囲い、むしろを四隅にかけただけの便所がありました。

亜熱帯地方に属するベトナム北部ですが、標高千五百メートル近くある高地では冬はかなり冷え込むことが予想されます。家屋の構造からは、アジア・モンスーンの高湿多湿の風土に適応しつつ、冬季にやってくる大陸からの寒気団をうまく防ぐ知恵が読みとれてきます。

スンさんによれば、モン族は基本的には核家族だといえます。子供の時には両親と同居していますが、結婚すると家を出て、夫婦で別の家を建てるのだそうです。しかしスンさんの夫は五人兄弟の末っ子で、長男の建てた家をそのまま居抜きでもらったそうです。

末っ子が結婚して家を出ると、長男は両親の家に入り、田んぼなどを相続して両親の面倒を見るのだそうです。空いた長男の家が一番末に回って来たという訳です。遊牧民などに代表される末子相続制



製粉機

度は聞いたことがあります。このように一度家の外に出た長子が再び家に戻り、親の遺産を相続する制度は初めて知りました。モン族の間では、最近では子供が二人とか三人とか少なくなってきたといいますが、かつては五人から十人というといのが一般的だったようです。長子と末子ではかなり年齢が離れていることが想

像されますから、合理的な制度なのか
もれません。

家の隅から隅までまるで家宅捜索のように熱心に見せてもらい、聞きづらいこともかなり突っ込んで聞いたのでスンさんはなぜそんなことまで聞くのかと時には怪訝な顔になりました。しかし私が日本の農家の生まれで、幼いころはこれに近い家で暮らしていたので興味があるのだと説明すると少しは納得したようでした。

スンさんの家を見る限りでは決して豊かな生活を享受できているとは思えませんでした。しかし曲がりなりにも一軒の自分の家があり、子供にもきちんと教育を施しています。何よりスンさんの福々しい笑顔をみていると貧しさは微塵も感じられません。

ベトナムは一九八六年のドイモイ政策導入後、急激な経済成長を遂げたことが知られています。国の定める貧困ライン以下の生活を送る人は人口の十五%まで減



少したといわれています。しかしその恩恵は、都市部など限られた地域にしか届いておらず、地方との貧富の差は拡大しているのも事実です。

「スンさんは英語を学校で勉強したんですか」

「結婚前はサパで外国人相手の商売をして

いました。そのころは英語が話せなかったんですが、十年ほど前にオーストラリアのNGOが村の女性を集めて英会話教室を開いたんです。私はそれに参加して勉強しました」

スンさんは一枚の古い写真をたんすの引き出しから取り出しました。そこには若い女性たち二十人ほどが、大きな倉庫のようなどころで白人の女性から英会話を



習っている姿が写されていました。貧しさから抜け出すのにより必要なのは教育です。この教室からたくさんガイドが育っていったそうです。

昔に比べると人口が増え、農地を持っていない人も増えてきているのですが、山間部では雇用の機会はきわめて限られています。ましてや女性が職を得ることは幸運に頼るほかありません。外国人による観光が一部の観光関係業者を潤すだけでなく、広くこの地域の人たちに利益をもたらすことが望ましいことはいまでもありません。昨日、サパの市場で会った赤ザオ族の女性、サオさんも達者な英語を駆使して、将来は自分の店を持つのが夢だと言っていました。

モン族の女性もザオ族の女性も働き者だという評判で、家事、育児はもちろんのこと、農作業にも男より多くの時間従事しているといった調査があります。その割に女性の地位は低いようですが、昨日と

今日の二人の女性を通じて、彼女たちが自立への道を歩み始めている兆しを感じ取ることができました。

藍染

スンさんの家で長らくよもやま話を楽しみましたが、まだ道は途上です。村の幹線道路まで再び急な細い道に戻りましたが、途中でスンさんの友達だという二人の女性に出会いました。簡単なあいさつを交わして行きすぎようとしたのですが、二人は私たちの後について、自分たちが来た道と一緒に始めました。

スンさんに話があるのかと最初は思っていたのですが、二人で何やら話しながら私たちの後についてくるだけです。二人とも愛想が良く、歩きながら草笛を吹いてくれたり、葦の葉で人形を作ってくれたりします。後で分かったのですが、この二人は自分たちが作ったお土産品を町に売りに行く途中だったのですが、外国人の私



を見つけ格好のカモに出会ったと狙いを定めた訳です。

背負っている籠の中を見ると、藍染の布で作った財布、コースター、帽子、ペンケースなどが入っています。いずれも作りが雑であまり興味が湧かなかったのですが、それを取り出す女性の手を見ると完全に藍染状態です。爪も手のひらも藍色で、恐



らく毎日のように手染めの作業を行って
いるのでしよう。藍染の現場が覗きたくな
りました。

つい先程まで自宅で藍染をやっていたと
いうイエンさんの家に連れて行ってもらう
ことになりました。イエンさんは私が何か
品物を買ってくれるかもしれないと期待
を膨らめますのか上機嫌です。イエンさん
は英語が全く話せませんがスンさんが一
緒なのでラッキーでした。

歩きながらイエンさんが藍草の生えてい
るところを教えてくださいました。小川が流
れる急傾斜の崖のようなところに雑然と
茂っています。藍草は連作を嫌うので、川

の水が新しい土を運んで来てくれる土手などに植えるのが一番良いのだそうです。後で調べて分かったことですが、日本でよく使われる藍は、タデ藍と呼ばれるタデ科の植物なのに対し、この地方のモン族が栽培する藍は、キツネノマゴ科の植物です。

サパ周辺の藍染は八月の今が最盛期なのです。七月末から八月にかけて藍の色素が葉に十分溜まります。それを見計らって刈り取るのです。藍と言う漢字は、草冠に監視の「監」です。中国では、藍を刈る時期を慎重に監視したことから、この字があてられたという故事来歴を聞いたことを思い出しました。

イエンさんの家を訪問する途中で彼女のご主人と行きあいました。どこかへ出かける最中のようなのです。女性と同じような濃い藍染の上下で、やはり藍染の縁なし帽子を被っています。モン族の男性は普通の洋服を着ている人が多いのですが、イエ



藍の葉

ンさんのご主人は奥さん手製の藍染の服を愛用しているのだそうです。

ところで、モン族の村で大人の男性と出会うのは珍しいのです。女性には頻繁に出会います。まず道で行き合うのはほとんどが女性です。畑で草取りをしているのも女性、家の軒先で何か手仕事をしているのも女性、村の辻でおしゃべりしている

のも女性です。いったい男はどこへ行ってしまったのか不思議です。スンさんに聞いてみたところ、男たちは日中、山へ木を切りに行ったり山菜を採りに行ったりしているのだと言います。しかし私の見たところ、男は家の中でぐうたらしているか、どこかに集まって酒でも飲んでいいるのではないのでしょうか。

イエンさんの家まではぬかるんだ小道



イエンさんの夫

を十分ほどでした。家の裏にある藍の汁をためた桶のところに早速案内してもらいました。二つの桶に八分目ほどの藍液はかなり深い紺色をしています。顔を近づけてみると、かすかに堆肥のような匂いがします。

イエンさんに藍液の作り方を教えてもらいました。まず刈り取った藍の葉っぱを水洗いして泥やごみを落とします。これに水を注ぎ二日ぐらい放置すると葉っぱの発酵が進み、黒っぽくなり、藍の成分が水に溶けだします。

発酵した葉っぱや茎を取り除き、藍成分が溶け出した液だけにしたうえで石灰を入れて良くかき混ぜます。二日もたつと藍成分が底に沈殿して来ますので、上澄み液を捨てるか泥状の藍の塊があらわれます。この泥藍にかまどの灰を水で溶いた灰汁(アク)を混ぜ、再びよくかき混ぜ、数日放置すると出来上がりです。

実はこの製法、スンさんのたどたどしい



通訳を介して聞き取ったので、正確かどうかあまり自信がありませんでした。そこで帰国してから私の地元の南アルプス市で江戸時代から染物屋を営んでいる井上

染物店の社長に藍染めについて聞いてみました。井上展弘さんには以前、神社に奉納する幟(のぼり)を作ってもらったこともあり周知の仲です。

その結果意外なことが分かりました。イエンさんの藍染の方法を私はほぼ正確に聞き取っていたのですが、日本のやり方はそれとは違うというのです。日本で一般的に行われている藍染めの方法は「すくも法」と呼ばれています。収穫した藍の葉を乾燥させて、堆肥をつくるように水をかけて発酵させ、数か月寝かせたのちに「すくも」という藍染の原料にしてから石灰や木灰などと共に藍をたてて布を染めるのだそうです。

つまり、すくも法は色素を含んだ葉自体を発酵させて染料とするのに対し、イエンさんの方法は、葉から色素を水に取り出し沈殿させ、色素が詰まった泥藍を作って染料にするという違いがあります。

この方法は「沈殿法」と呼ばれ、日本で



は沖縄地方で行われています。沈殿藍の製造はすくも藍に比べると非常に簡単で、一週間以内に製造できるのが特徴だそうです。しかし簡単にできるからといって質が落ちる訳ではありません。琉球藍の色合いは他の藍に比べ深みがあり、それでい

て透明感に溢れ、鮮やかとの評価が与えられています。

イエンさんの家の庭にはまだ染めたばかりの布がたくさん干してありました。彼女は先ほど見せてもらった桶に布を浸し、乾かしてまた付けるという作業を何度も繰り返すのだそうです。

布に付着した藍の上に藍を何回も重ねてゆくわけです。何度も何度も染めると、青味が濃くなります。付着ですから、糸や布の中に、藍の青い色は入って行きません。つまり、コーティングしているようなもので、その分擦れに強く、繊維を丈夫にするのです。当然、洗濯にも強くなりますから、野良着などの労働着に適しているのです。黒モン族や赤ザオ族の人たちが、何回も染めた黒に近い藍染の布をまとっている訳がこれで分かったような気がしました。

化学的染料がコストなどの面で大きな進化を遂げ、古代から行われてきた藍染

めは急激に減少することになりました。しかし、自然志向が高まりつつある時代に、藍染めはすこしずつ息を吹き返しつつあるのではないのでしょうか。

イエンさんからは彼女の旦那さんが被っていたような藍染めの縁なし帽子を三ドルで買いました。まだ藍が強く匂う、できたての帽子です。



購入した藍染めの帽子

できあがるまで一カ月ほど染めを繰り返したといいます。工業的に大量生産されたものではなく、作り手の顔が見えるものはなんとなく暖か味があります。この帽子はイエンさんの笑顔とともに旅の良い思い出となるでしょう。

イエンさんは毎日染物をやっていると、藍色が手に染み付いてしまうと笑っていました。手のひらの色は石鹼でごしごし洗うと何とか取れるけれど、爪の色はなかなか落ちないようです。

しかし青く染まった爪は働き者の象徴です。そして「手打ち」とか「手染め」とか仰々しく叫ばないでも、この手を見れば手作りは一目瞭然だというのが良いのではないのでしょうか。

スンさんにはランチャオ村だけでなく隣のタヴァン村も案内してもらおうつもりでしたが、スンさんの家の見学や藍染め見学に大幅に時間を取ったため、運転手と



打ち合わせしていた迎えの時間が迫ってきました。その上、雲行きまでまた怪しくなってきました。しかし見たいものは見たような気がします。村の人たちみんなに愛想よく声をかけてもらい、なんとなく心豊かな気分で帰路に着くことができました。

エピローグ……稲作文化

私が旅したベトナム北西部山岳地帯は北緯二十二度から二十三度の間で、北回帰線が通っている辺りです。ベトナムはユーラシア大陸の東の果て、東アジアと呼ばれるところに位置しています。世界地図を広げ、北回帰線に沿ってベトナムから西に視線を移動させてください。

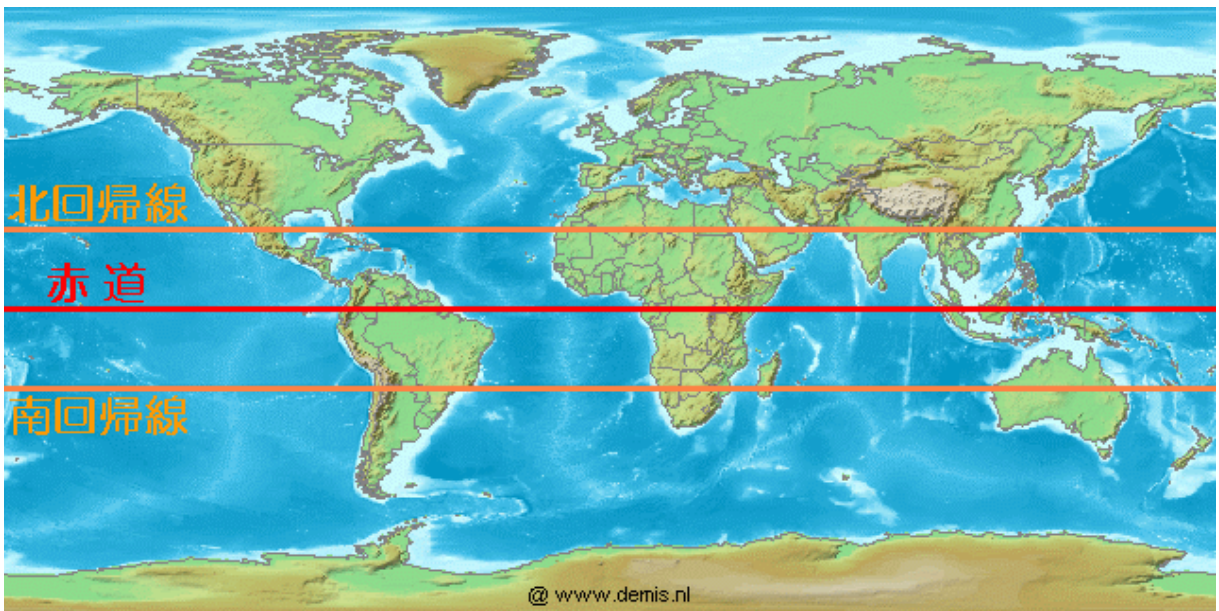
あなたの視線はインドのデカン高原を通りパキスタンの南をかすめサウジアラビアに到ります。さらに西に進んでアフリカ大陸に入るとエジプト、リビア、アルジェリア、モーリタニアといった国が並んでいます。

これらの国はいずれも乾燥の国です。インドとパキスタンにまたがるタール沙漠、サウジアラビア沙漠、サハラ沙漠と世界有数の大沙漠がこの北回帰線上に並んでいるのです。これには理由があります。地球が受け取る太陽熱は、赤道地帯で一番多く、そこで暖められた大気は上昇しま

す。その過程で雨となって多くの水分を放出し、上空で乾燥した大気となります。この大気は、高緯度へ向けて流れますが、地球の自転により右へ右へと曲げられ、やがては西風となり、回帰線付近以上には北上できなくなります。

ところが、赤道方面からは次々と後続部隊がやって来ますので、過剰に滞留した大気は下降流となって吹き下りるしくなくなります。乾燥した下降流が常に吹くこの地帯は、中緯度高圧帯と呼ばれ、雨がほとんど降らない乾燥地帯となるのです。

ところが同じ北回帰線辺りに位置しながらベトナム北部は沙漠どころか地球上でも有数の多雨地帯です。理科年表によれば、サハの年間降雨量は二、八六二ミリもあります、雨季の真ん中の六月から八月の三ヶ月間の月間降雨量は四百ミリを超えています。これは世界の年平均降水量の約三倍にも当たります。



雨が多い理由はヒマラヤ山脈にあります。インド洋で発生した雨雲は、北上しますが、標高七千メートルから八千メートルのヒマラヤ山脈を越えることができず、進路を東に変えて東南アジアにやってきます。この水分を含んだ雨雲がたくさんの降雨を東アジアにもたらし、その気流の帯はやがて日本列島にまで広がり、梅雨となるのです。

したがって、ヒマラヤ山脈がなければ、雨雲は東にずれることなく北上、東アジアに雨を降らすことはなかったかもしれないのです。ユーラシアとインドがちょうど中緯度帯で衝突してヒマラヤ山脈が形成され、地球の大気の流れの巨大な障害物となり、モンスーンという気候システムを誕生させたのは地球の奇跡といっても過言ではありません。

このインド亜大陸とユーラシア大陸の衝突は、モンスーンの豊かな自然を作り上げただけでなく、稲作を基盤とした農業

や文化に大きな影響を与えたことは確実です。断続的に降り続く雨のベトナム山中を濡れながら彷徨して思ったことは、日本を含む東アジアが地球上でも稀有な水に恵まれた地域なのだという事です。そして



てそこはまさしく天の恵みである雨を利用した稲作の故郷です。ヒマラヤ山脈がなかったならば沙漠だったかもしれない地域がアジア稲作圏の中心を形作っているのです。

さらに東アジアに稲作圏が広がったのは気候条件に恵まれただけではないとの印象を私は持ちました。ベトナム北部山岳地帯はネパール辺りを中心に東西に長く連なるヒマラヤ山脈の東の端に当たります。山々はまだそれほど浸食を受けず、急峻な山地とそれに挟まれた谷によって特徴づけられています。この地に降った雨は急峻な斜面を土砂とともに流れ下り、谷には豊富な水量を持つ河川と扇状地を形作ります。

その流水によって運ばれ積もった土砂は沖積土と呼ばれますが、この豊富な養分を含んだ土が稲作の永続性にかかわっているのです。沖積土壌ゆえの有利性と毎年

の灌漑による養分供給が、化学肥料に依存しない稲作の永続性を可能にしているのです。休閑によって肥沃度を維持するとは水田では必要とされません。

このことを検証するには、世界一の農業先進国といわれる米国の農業と比べてみれば明確です。たとえば米国の農産物生産額一位のカルフォルニア州をとってみましょう。穏やかな起伏が続く広大な平原ですが、年間降雨量はわずか二百五十ミリしかありません。灌漑用の水は北部の山脈地帯から七百キロ(東京・函館間の距離)の幹線水路で引いているのです。地下水のくみ上げによる灌漑も行われていますが、灌漑水に含まれる塩類が農地に堆積し、約三分の一の農地に障害が発生しているといわれています。

また、米国中西部の穀倉地帯は今年(二〇一二年)、五十年ぶりの記録的な干ばつに襲われ、大豆やトウモロコシの相場は過去最高値を記録しました。このように世界一の農業生産国といわれる米国では、

気候の面からも土壌の面からも極めて危
なつかしい基盤の上に穀物栽培が成り立っ
ていることが分かります。



もちろんベトナムの水稻栽培が恵まれて
いるというつもりはありません。ベトナム
山間部の一戸当たりの水田面積は数十ア
ールでしょう。カリフォルニアの一戸当た
りの水田面積は約百七十ヘクタールです

から、ベトナムの一戸当たりの耕作面積は
約三百分の一に過ぎません。水田が分散
化している上に大きな高低差もあります
から、必要とされる労働量は米国の農業
に比べけた違いに大きくなります。腰は
曲がり、首が回らなくなり、疲労の極に
達するまで働いてやっとまともな収穫が得
られるのです。水呑み百姓の子だった私
は、それを身を持って体験しています。

にもかかわらず私がベトナム北部山岳
地帯の傾斜地に造られた棚田に思いを寄
せ、次の世代にもぜひ引き継いでほしいと
考えるのは、それが風土に根差し、長い歴



史の上で検証を重ねられてきた農業だか
らです。私たち東アジアの民は、長い歴史
を通じて、稲作を基盤とした生活様式を
育んできました。

稲作には雨や気温など自然の恵みが不
可欠です。自然を畏れ、自然を敬い、自
然に祈り、自然に感謝する私たちのここ
ろは水田稲作を生業とする限り、必然的
に生まれてくるものです。八百万の神を
崇め、豊作を祈願し、収穫に感謝する祭
りの風習や東洋思想は「稲作文化」の基盤
をなしています。

現在の考古学的な研究の成果として、
私たち東アジアの稲作の歴史は六千年前
まで確実に遡れるといわれています。最古
の水田遺構は揚子江下流の中国江蘇省呉
県の草鞋山(そうあいさん)遺跡で見つかっ
ています。モン族とかザオ族とかいまベト
ナムで呼ばれている人たちの祖先は、この
揚子江下流域から戦乱によって押し出さ
れ、種籾と稲作の技術、それに伴う生



能登輪島の白米千枚田

活様式を持って山伝いに南下した人たちののです。

その時に、海流に乗って朝鮮半島南部や北部九州に移ってきた人たちも当然いたでしょう。佐賀県唐津市の菜畑遺跡からは炭化した米や水田の跡が見つかってい

て、いまから約二五〇〇年前の縄文晩期には日本でも稲作が行われていた確実な証拠とされています。

ベトナムや日本を含む東アジアの稲作は、数千年の歴史に裏打ちされた農業なのです。それなのに日本の稲作は、戦後の目覚ましい工業化によって変質を迫られ、それとともに稲作農耕文化的なものも否定がすなわち「近代化」であるような意識が広く日本中に広まってしまうました。

安易な近代化志向の結果として、山間部など耕作条件の悪い水田は放棄され、外国からの安いコメを輸入にすればよいという経済合理主義によって日本の稲作は脅かされています。しかし棚田とその背後にある森林は、水源かん養や土砂の流出・崩壊防止などに大きな役割を果たしていることを忘れてはなりません。

二十一世紀はアジアの時代といわれる。二〇五〇年までにアジア諸国を合わせた総GDPは二〇一〇年に比べて十倍に成

長し、世界経済の半分以上を占めると見られており、また一人当たりの収入は、二十一世紀中葉までには現在のヨーロッパの水準に追いつくと予想されています。

アジアの一員としてベトナムもいま経済成長の離陸期を迎えています。産業の発展には勤勉さや倫理観が必要なのはいうまでもありません。それらはまさしく稲作文化の根底をなしています。

稲作は代かき、田植え、草取り、水温管理、稲刈り、脱穀、土起こしなど手の掛かる作業から成り立っています。そして勤勉に農作業に取り組めばその成果は豊かな実りとなってもたらされます。

勤勉な労働力や信頼性の高い製品を生み出す緻密さは、棚田のような狭い田んぼで、手を抜かず、品質にとことんこだわるといふ稲作の文化によって長年培われてきたものに違いありません。

しかし、ベトナムが日本の辿った道を歩まないように切に願わざるをえません。

作家の井上ひさしさんは「一枚の田んぼは一枚のモナリザ」と同じような文化的遺産であると「コメの話」の中で書いています。だったら棚田は数百枚、数千枚のモナリザに匹敵する文化的な遺産です。

落ち葉や虫の死骸が降り積もり、腐葉土になり、更にその上にまた新たな落ち葉や虫の死骸が積もってゆくように、文化というものも古い基層の上に徐々に新しいものが積み重なって重層化して行くのではないのでしょうか。雨季真っ只中のベトナム北部山岳地帯を雨に濡れながら旅して感じたことは、東アジアの稲作文化とは何か、私たちはもう一度真剣に考えなければならぬということです。

そして東アジアの稲作を可能にしてくれたのは、地球の奇跡ともいえるモンスーンがもたらす水です。地球は水の惑星といわれていて、地球表面の約四分の三は海で覆われています。この地球を直径五センチのボールに縮小すると海の水はどれくら

いの量になるか、ご存知ですか？

答えは一滴です。わずか一滴の水が薄いいべールのように地球を取り巻いているのです。しかも、その水の約九十七・五パーセントが海水で、残りわずか二・五パーセントの淡水のほとんどが南極や北極の氷なのです。川や湖で人間が利用できる水は〇・〇一パーセントに過ぎません。

世界を旅して、日本を含む東アジアほ

ベトナムの国内総生産(名目GDP)推移グラフ(1985~2019年)
(graphtochart.com作成)



ど緑に恵まれた地域はありません。天の恵みに感謝しながら筆を置きます。

fujizakura

参考文献

- 『ヴェトナム新時代―豊かさへの模索』 坪井善明 2008
- 『稲作の起源』 池橋宏 2005
- 『稲作文化と祭祀』 にひなめ研究会編 1999
- 『東南アジア山地民族誌』 白鳥芳郎編 1978
- 『儀礼・民族・境界・華南諸民族「漢化」の諸相』 竹村卓二編 1994
- 『ヤオ族の歴史と文化』 竹村卓二 1981
- 『The Yao』 POUJRET 2002
- 『稲のアジア史』 渡辺忠世編 1987
- 『転機に立つカリフォルニア農業と米作』 勝山達郎 1993